

風の末裔シリーズ・3rd シーズンの7

～ムーンピラー 〈幸せのおすそ分け〉～



©西風そら

<http://nisikaze.sakura.ne.jp>



西風の里の平穏な朝。

オレンジの瞳の娘の騎馬が、崖を飛び降りて、里の入り口に姿を現した。

碧緑へきりよくのたつぷりした髪に翡翠の珠の櫛。亡き長
の一人娘、モエギだ。次期長の責任感を秘めた、強い、凛とし
た表情。

老人と女子供ばかりの部落だ。護りは堅くしてある。外から
入るには三重の結界を抜けなければならない。

「お帰りのさい、モエギ様。外界の様子はどうでした？」
厩番の少年が駆け寄って馬銜はみを取る。

「人間の商隊が砂漠を長い列を作って通り過ぎていた。戦は暫
くなさそうだ。他の部族も一時期より落ち着いて、穏やかな感
じだな」

「砂の民の部族ですか？」

「……馬を頼む、シド。右前がソエっぽい」

「……はい……」

質問に応じてくれなかったモエギには逆らわず、シドと叫ば
れた少年は、手のひらで馬の右肩から蹄までをのっくの撫で下
ろした。

「球節に熱があります。湿布して冷やしておきます」

「ああ、頼む」

「モエギ様……」

立ち去ろうとするモエギに、シドは一度ためらってから、思い切って声を掛けた。

「ハトゥン様と仲直りしたんですか？」

モエギはキッと振り向いた。

「男のお喋りは下品だぞ」

「……すみません……」

少年はシユンとして口を結んだ。

言ってしまったからモエギは、八つ当たりするような下品者は自分だ……と、反省した。立ち止まり、ポケットから干菓子を探り当て、引き返して少年に渡しながら、ちょっと声を優しくして言った。

「馬を、頼んだな」

シドは頷うなずいて、馬を引いた。モエギを見送ってから、干菓子は馬にくれてやった。

「モエギ様は、僕がいつまでも、齒が軋むような甘い菓子で喜ぶ子供だと思っている」

ハトゥンはモエギの幼馴染で、この辺りで一番勢力の強い、砂の民の部族の総領息子だ。武闘派で知られるその郎党の中で

も、一際砂漠に名を馳せる、漆黒のハトゥン。

シドはそのハトゥンに剣の手解きを受けていた。

少年が物心付いた頃から、西風の里は老人と女子供ばかりで、まともに武術を教わる機会なんてなかった。だから、剣を教えようかって言われた時、震えが来る程嬉しかったし、頼もしい兄貴が出来たみたいで、ワクワクした。

剣の腕が上がれば、モエギ様を護れる本物のナイトになれる。

「あのヒトが来るまでは、何もかも上手く行っていたのに……」

シドは厩の奥を見据えて唇を噛んだ。

今は蒼の長の鬮牙の馬が繋がれているが、数日前までは一回り小さい、青っぽい草の馬が居た。

その馬の主、蒼の長の甥っ子は、線の細い、ひよろひよろとした、頼りなさ気な青年だった。こんなんでは蒼の長の代わりが務まるのかと不安に思ったが、部落の女の子達の騒ぎようは尋常じゃなかった。

女って分かんない……。あんな、オンナオトコのどこがいいんだか。ハトゥン様の方がよっぽどカッコイイのに！

そのナナって名前の甥っ子がハトゥンと争いを起こし、二人してモエギの怒りを買ったのだ。お陰でそれ以来、ハトゥンに会えず、剣の稽古もストップのままなのだ。

シドは溜め息一つ付いて、モエギの馬の手当てを始めた。

蒼の長が滞在しているのは、里の中心…、昔の宿屋を改装した客間だ。

空席になっっている西風の長の代わりに、この土地に滞る風を流す為に、里に常駐している。その他に、子供達への説法や乗馬の指導、老人達の萬相談等、常に多忙にしているが、何と云ってもこのヒトがいる事で、他部族からの侵略の抑止になるのが大きかった。

前長の時代に、この地に人間が戦争を持ち込み、人外界も荒れた。今の西風の里が老人と子供ばかりなのは、その時代の爪痕だ。眷族である蒼の一族が、西風を援助する為に、常に一名、それなりの能力者をよこしている…というのが今の形だ。

モエギが御簾を開けると、長は山のような書き物に埋もれて目を通して最中だった。

「おかえりなさい、モエギ。入る時は声を掛けて下さいね」
長は書類から、目を上げずに言った。

「蒼替えの最中だったらどうするんです。責任取ってお婿に買ってもらいますよ」

多分ジョークなんだろうが、スベリ過ぎててどう反応しているのかわからない。

「外から戻ったら一番に報告に来るようになって決めたのはおっ

さんだろ」

「そりゃあ、貴方の帰りが遅いと、心配しなくちゃなりませんからね」

まったく、屁理屈のたつ男は大っ嫌いだ！ モエギは眉間にシワを寄せて、口を突き出した。

「あのさ、今回、おっさんの滞在期間は短いんだろ？」

「ええ、ナナが妹の結婚式の出席で抜けた場繋ぎですからね。私は里にやりかけの仕事を残していますし…」

長は別の書類を取って、前の書類に何か書き写しながら、上の空で言った。

「それで…、次、交代で来るのは、ツバクロか？ まさか、またアイツなんて事は…」

「順当で言うと、ナナなんですけど…」

長は書類から顔を上げてモエギを見た。

「貴方は、ツバクロがいいですか？」

「いいですかって？ 当たり前だろ！ ナナは困る！ あんな無茶苦茶な奴！」

長はベンでこめかみをカリカリ掻きながら視線を落とした。

「無茶苦茶…ですか…」

「無茶苦茶だろ！」

「身内贖戻ですが…、ナナは、我が一族の中で一番平和的で、

「族の良心みたいな存在なんです」

「…まさか…!!」

「ホント、私も、まさかまさかでしたよ」

「……………」

「普段からあんな無茶苦茶な子じゃないんです。どつかどつか、それだけは知っていてやって下さい」

「……………」

モエギが継ぐ句をなくした所で、不意に長は顔を上げて窓辺に寄った。

バサバサと羽音がして、大きな鷹が飛び込んで来た。長が里との通信に使っている特別な鷹だ。足から筒を外して手紙を出すようにすると、何かが落ちて転がった。

「おやおや…」

足元に転がったそれをモエギが拾い上げた。えんどう豆程の、橙だいたい色の小さい珠。まさか、アイツから私に贈り物、なんて事じゃ…？ モエギは身震いした。

手紙を読み終えた長は顔を上げた。

「その石、貴方に…、みたいですよ」

「…げ!!」

「そんな、毛嫌いしないで。って言うか、新婚の新郎からの贈

り物ですよ。『幸せのお裾分け』だそうです」

「新郎？ あいつの妹の結婚相手…カワセミって奴か？ 会う

た事もないの…？」

「カワセミにはね、あまりそういふの、関係ないですよ」

「……………」

「どれ、その櫛を貸して下さい。翡翠珠の横に付けると良い色合いになりますよ」

モエギが差し出した櫛に、長は器用に橙の珠を嵌め込みながら、ついのように言った。

「ああ、それと、私と入れ替えに明日来るのは、やはり、ナナですね。ってゆーか、これからツバク口の代わりに、ずーっとナナが来るそうですよ」

「……………」

「肝が固まったようですね」

「カワセミって…たいした術者だって、言っていたな…」

「ええ、里で右に出る者は居ないでしょうね」

「……………」

モエギは橙の珠が追加された櫛をマシマシと見つめた。薄緑の翡翠の横に橙色が良く合い、それぞれは地味な色なのに、二つ並びと華やかな感じになった。

「カワセミは、ナナと仲が良いのか？」

「蒼の里はみんな仲良しですよ。でも、ヒトの心を操るみたいな術を使う不埒者は居ませんよ」

モエギは罰悪そうに髪をまとめて櫛を差した。

「そうか…ならいい…」

「心配しなくとも、そんな便利な術が使えたら、皆苦労していませんよ、ふふ…。おお、その橙色は貴方の髪に良く似合いますね」

長は微笑んで、また視線を書類に戻した。

モエギは何となく髪を気にしながら表に出た。

機(はた)織り小屋の外で、糸を抱えてワキヤワキヤお喋りをしていた娘達が、モエギを見止めて挨拶した。

「モエギ様、外の様子は如何でしたか？」

「早く紫の丘へ行きたいわ。木の実が一杯な筈なのに、みんな鳥に食べられてしまっわ」

「ああ、戦で物騒なのは去ったみたいだな。だけど、娘達だけで出歩くのはもう少し待ってくれ。まだお前達が安全だとは言えない。すまない……」

「あ、いえ、いいんです」

ツバク口の件でモエギが老人達を一喝して以来、里の娘達の

モエギへの態度が変わった。それまで怖がって遠巻きに敬遠していたのが、少しづつ話し掛けるようになった。

「ね、モエギ様、あの方…長様の甥子さんは、次はいついらっしゃるのでですか？」

「そう、百合根の甘く煮たのをご馳走しようと、水に晒して準備しているの。西風の里の名物を、気に入って下さるといいですね」

モエギは眉をビクリと動かした。

娘達はナナのやらかした悪行は知らない。老人達にも内緒だ。どちらに知らせても、それぞれ別方向で厄介になるのは明らかだ。知っているのはナナの身の回りの世話をしていた厩番の二人の少年だけ。

「なあ、お前達…、いっぺん真面目に聞いてみたかったんだが、何で、見かけだけでそんなに男に熱を上げられるんだ？ 見目が良くとも、性格悪い場合もあるだろう？」

「……っ……」

娘達は目を丸くして顔を見合わせた。多少年長の娘が答える。

「…だって、外身を好きになると、中身を好きになるのは、違っじゃないですか。中身を好きになったら、それは本当になっちゃうでしょうっ？」

「…っ…本当？」

「本当の好きになっちゃったら、楽しみなくなるもの」

「……ふふ」

モエギも分らないが、言っている娘も分かっていなくて、上手く説明出来ないようだ。まあ、ツバクロと一緒に、ナナも里の娘達には無害で、その点だけは安心だ。

「モエギ様」

娘達と別れて、水場で手足を洗っていたモエギに、青銀色の髪が手拭いを差し出した。シドの相棒の厩番、ソラだ。

シドが西風の一族らしく艶色の肌にあつぷりした青い髪なのに、ソラは猫毛で少し色素が薄かった。

「今、蒼の長様に聞きました。明日またナナ様が来られるそうですね」

「ああ……」

「お断り出来ないのですか？ ハトゥン様といさかいを起こすヒトなんて、どんな理由があつたにしても、…僕……」

シドよりちょっと大人しくて冷静なソラだって、どうやらハトゥンの味方ようだ。

二人ともハトゥンとナナが決闘したのは知っているが、理由は教えていない。二人も聞いて来なかった。

「こちららは世話を焼いて貰っている身。文句は言えない。まあ、

蒼の長は物事をちゃんと見ていてくれる。ナナが里に馴染めなければ、考え直してくれるだろう」

モエギは深い意味もなく言ったのだが、ソラの目に光が横切った。

夜の廐の横の小さな小屋。

元は朝早い者用の待機小屋だったのだが、今はシドとソラが身の回りの物を持ち込んで寝起きしている。二人が横になると一杯のこの廐屋が、彼らの住処だ。

西風の里の子供達は、ほとんどが親なしだ。長く土地が争いで荒れた為、武器を持てる大人はことごとく絶滅してしまった。祖父母と暮らす子もいるが、大体が親族の子供同士だけで助け合って暮らしている。

だから、少年二人、朽ちかけた小屋に寝起きしていても、特別な事ではなく、気に止めるような事でもなかった。

「モエギ様がそう言ったのか？」

風間分配された干し魚を裂きながら、シドが聞いた。

「うん、ナナ様が里に馴染めないと蒼の長様が見て取ったら、お役「メンになるだろうって」

ソラはバケツに汲んできた水を大瓶に移しながら言った。

「それって、暗に、僕達に動け……って事かな？」

「そう…だと、思う。モエギ様は立場上はつきり言えないし」
シドは唇を噛んで魚を裂き続けた。

「まったく…ああいうの、回ってんだっけ？ えっと、えーと…」

「横恋慕」

「ああ、そう、それ!! あのヒト、モエギ様を見る目が半端じゃ無かったモン、初対面から」

「ハトゥン様に会えば諦める…って思ったんだけれどね」

「ハトゥン様への手紙を託された時、イヤ〜な予感がしたんだ」

二人はモエギが思うほどにチビッではなかった。

「まあ、モエギ様の魅力に気付いたのは、褒めてやるけれど」

「シド、だけど僕達だってそんなにあからさまには行動出来ない。蒼の一族は部落にとって恩人だし、大切な長様の甥っ子だ。

遠回し〜に、ナナ様の方から、馴染めないって思わせるんだ」

「難しそうだな」

「僕、考えがある」

冬の、継ぎ目のない白い空から、淡い雨が落ちて来た。上空に黒い点が現れ、霧雨と一緒にフワフワと心許なく降りて来た。真っ青な顔でもうろうとしたナナだ。

馬は平気の平座で地上にズシンと着地した。鞍上のナナはグワ〜と揺られて馬の背峰に顎をぶつけそうになった。

「大丈夫ですか？ ナナ。まだジェット気流は慣れませんか？」
「へ、平気です…」

ナナはよろけながら下馬するが、膝がわらって蒼の長に支えられた。

（だらしがない…）

シドとソラは口には出さないが、そう思いながら、馬を受け取った。

蒼の長様はいつも涼しい顔で降りて来るし、ツバクロ様なんか、たまに宙返りなんて交えながら、惚れ惚れする降下を見せてくれるのに。

まだ千鳥足のナナに、老人達は形式ばった長い歓迎の辞を述べた。

西風の里の次期長のモエギも一応、出迎えて挨拶をする。さぞやネチこく再開の喜びを示されるかと、恐々と構えていたが、意外にナナはあっさり受け流した。

「ではよろしく頼みます」

と、チラと目を合わせただけで、雨衣を脱いで、蒼の長との引き継ぎに入ってしまった。

「……………」

モエギは拍子抜けしたが、内心ホツとした。

ナナはこちらが考える程に子供でもなかつたんだろう。大人気ないコトをしたと、反省しているのかもしれない。

まあ、わだかまりなく仲良くやれるなら、それに越した事はない。こちらだってグーパーンチをお見舞いしたんだ。お互い様ってコトでいいだろう。

もともと性格のサバサバしたモエギは、そう判断して胸に納めた。

蒼の長には分かっていた。

平静を装ったナナは、実はモエギの前で、心臓が喉元まで上がりそうな程に緊張していたのを。

鷹の手紙にはノスリの私信も入っていた。母親代りをするフィフィからナナに、みっちりと教育的指導が入ったと。

「この分だと大丈夫そうですね」

明日から長雨になりそうなので、小雨の今日の内に出発したい。ナナが自重して大人しくしてくれてくれるなら、安心して引き上げる事が出来る。元々、落ち着きのないツバク口よりは、実直なナナ向きの仕事なのだ。まだ若いが、時間を掛けて里の者の信頼を得て行けばいい。

こんな風にそれぞれの大人が丸く納まる方向へ落ち着こうとしている裏側で、シドとソラは厩の隅で画策していた。午前中

に荒地で採って来たコカの実を、殻から剥いているのだ。

「無味無臭だけど、枕にこれが入っていたら、頭が冴えて眠れない。単純な事だけれどね、眠れないと身体のパランスが崩れて、総て上手く行かなくなる。忘れっぽくなって失敗が多くなる。結果、何だか西風の里は、馴染めない…となる」

「………凄いな。よくそんなイヤらしい事思い付くな」

「一生懸命考えたのに…」

「お前達、こんな所にいたのか」

外の窓からモエギが顔を出して、二人は飛び上がった。

「どうした？ 何かしていたのか？」

「あ、あの、馬具の修理を…」

シドがワザとらしく手近の頭絡を手を取った。

「蒼の長が発たれる。鬪牙の馬の馬装を頼む。それから、お前達に挨拶したいと」

「は、はい…」

ソラは後ろ手に隠した実の付いたままの枝を、厩の板の隙間に押し込んだ。そうして鬪牙の馬を引いて馬繋ぎ場へ急いだ。

「貴方達のお陰で、不慣れた土地でも快適に過ごす事が出来ま



した。感謝していますよ」

蒼の長は二人の前に立ち、順番に額に触れた。触れられた所からフワッと穏やかな気持ちになれて、二人はこうやって長に触れられるのが好きだった。祝福の魔法っていうらしい。

「ナナの事も宜しく頼みますね」

「…はぐ」

蒼の長は手を振って上昇して行き、二人は少し後ろめたい気持ちになった。

でも、望みのないモエギ様の側にいない方が、ナナ様だって辛い思いをしなくて済むんだ。二人は昨日話し合った結論を、無理矢理頭の表面に引っ張り出した。

その日の午後からナナは仕事に没頭していたので、二人は寝所の枕を余裕ですり替える事が出来た。しかし、夜になって、厩横の住処小屋で、落ち着けないのは二人の方だった。

あんなにヘトヘトで空から降りて来て、午後も里の為に働いて、挙げ句、夜眠れないのか…。ちょっと可哀想過ぎるかも…。一日目にして早くも二人の良心が痛み出した。

どちらからともなく顔を見合わせた所で、不意に想い人が顔を見せた。

「…やあ…」

「なっナナ様！」

「何か、ご用ですか?！」

「うん…、僕の寢所へ来てくれる?！」

企みがバシたのか?と、怖々着いて行くと、ナナの客間は足の踏み場もなかった。

カゴに入った干し果物やら、器に入った様々な料理が床一杯に並べられている。湯気の立った物もあれば、なけなしの材料を集めて作られた焼き菓子なんかも良い匂いを漂わせていた。

「……………」

二人は呆れた目でそれらを見下ろした。多分女の子達が我先に差し入れて来たのだ。

「こんなに、貰ってもねえ…！」

ナナが呟いて、二人はピクリと肩を震わせた。

このヒトに、里にこういう贅沢な菓子がいつも普通に存在すると思われるのも嫌だし、それを分け与えて自分達を抱き込もうとされるのも嫌だ。

「僕達も、甘い物に飛び付くような子供でもありませんから！」

ソラがちょっとひねくれた言い方をした。

「うん、勿論君達にだって食べきれないよね！」

ナナはさらりと受け流した。

「甘い物が好きな子供のおうちへ、持って行ってあげてくれな
いか?！」

「……………」

二人は一瞬茫然としてから返事をした。言われてみれば当然
なんだが、言われるまで気付かない事である…。

「君達ならくまなく行き渡るよう分配出来るだろうし。雨の中、
大変だろうけれど、頼むよ！」

「ああ…はい！」

二人は菓子を運ぶ算段をし、シドは荷車を取りに行った。

「ねえ、ソラ…！」

ナナはベッドに腰掛けて、枕をポンポン弄もてあそびなが
ら言った。

「はい…?！」

ソラはちょっとドギマギした。

「どうしたら、こういうの、無くせるんだろ？」

「女の子達が貴方へ貢ぎ物を届けるのを…ですか?！」

「…うん…。食べ物や住む家が、片寄らないで、本当に必要な
者達の所へ自然に流れるようにするには、どうしたらいいんだ
ろ?！」

「……………」

「里の中ですから滞る場所がある…」

「…あの……」

「うん？」

「枕にシミがあります。取り替えます」

「…？ いいよ、別に」

「取り替えますせて下さる？」

「…？」

「それで、枕、取り替えたのか？」

小さな荷車を引きながら、シドが聞いた。

「うん、ごめん…、相談なしに」

シドは、荷台の食へ物に雨がかからないよう掛けられた幌布を支えながら、答えた。

「いいよ…、僕も、気が進まなくなっていた」

シドはシドを振り返って苦笑いした。

「どうしたら無くせるかって…、言えばいいと思っけれど…、」

女の子達「」

「そういうのじゃ駄目なんだって。言われて、従っただけじゃ、」

自分がいなくなったら、おんなじだって「」

「……………」

子供達の住む家はそんなに多くない。一軒当たりの人数は多いけれど。空の皿の山を荷車に積んでナナの所へ戻ると、部屋は既に書類の山に埋もれていた。

「苦勞様、ちょっと待って…」

書きかけ図面を脇に避けて、ナナは鞆袋から小さな瓶を引っ張り出した。

「お土産」

「>…？」

「甘い物、好きじゃないって知らなかったから、「メン」でも、わりと美味しいから食べてみて、蜜柑の蜂蜜漬。僕の妹が作ったんだ」

「僕達に…？」

「うん」

「モエギ様にじゃなくて？」

「モエギ殿には風間同じ物を渡したのみ」

「女の子達には？」

「厄介の種になる…」

二人は肩をすぼめて笑った。

そうして二人同時に手を出して、小さな瓶を受け取った。

二人が暇をいして、小屋へ帰る道々振り向いても、ナナの部屋の灯りは着いていた。どっちみち満足な睡眠は取れないんだ、

あの……。

小さな小屋で瓶の封を開けると、甘酸っぱい香りが広がった。実は二人とも甘い物はそこそ好きだった。

翌日は朝から土砂降りの大雨だった。

ナナは早朝から雨について、里上空の風を流しに飛び立って行った。ついでに周辺の見回りもして来るから遅くなると言っていた。視界の悪い雨の日は、怪しい物がうろつく絶好の環境らしい。

そろそろナナ様が帰る頃だ…と、二人が雨衣を着始めた所で、髪から滴をたらしたモエギが飛び込んで来た。

「私の馬を出してくれ！」

「どうしたんですか？」

「娘が一人、帰らない」

二人、大急ぎでモエギの馬に鞍を置いた。慌てて馬装したので、心配がおかしいのに気付けなかった。

「勝手に外出したらしい。紫の丘へ行くって……」

モエギが言い終わる前に、馬は首を振って大ジャンプして消えた。

「……?!」

今、何か、変だった？ モエギ様は確かに急いでいたが、何

かが、いつもと、違った……？

雨の中、二人が顔を見合わせて何か言い合おうとした瞬間、上空からナナが降って来た。鞍の前に、機織り場の女の子を一人乗せている。

「ナナ様?!」

「雨で方向を見失っていた。随分離れた所にいた。たまたま見付ける事が出来て、よかった」

女の子は呑気にニクニクして、ナナに助けられて馬から降りました。まさかとは思うが、ナナ様の気を引く為にわざと里を抜けて、うろついていたんじゃないだろうか？

二人はひっぱたいてやろうかという気持ちを抑えて、ナナにモエギの事を報告した。

「モエギ殿の事だから、心配はないと思うが……。取りあえず探しに行ってくる」

「あの一！」

「ん……？」

「馬が何だか変だったんです」

「えっ?!」

「気のせいかもしれないけど……」

「……!! とにかく、行くー！」

ナナの馬は、雨衣を翻して、さっきまでとは違う動きで、旋風を起こして急上昇した。

地面の三人は風に吹っ飛ばされて尻餅を着いた。娘は地べたで泥だらけになって情けない声を出した。

ナナの馬のあんな乱暴な奔進は初めて見る。もしかして、普段は力一杯制御しているのか？

モエギは凍り付いていた。馬がまったく言う事を聞かないのだ。

どんなに御しても馬術も受け付けず、狂ったように大きなジャンプを繰り返して、今まで来た事もない高空まで達してしまっただ。もう雲を越えて雨の上だ。勿論モエギには未知の世界。

馬が勝手にモエギから能力以上の風を引き出して、雲の上を駆けているのだ。こんな事態は初めてだ。

幾ら風の精のモエギでも、この高さで落馬したら……ちよつと自信ない……。

そついうコト、考えないようにはしようとする程考えちゃって、身体が強張り、鎧(あぶみ)を外してしまった。タテガミを指に絡めて、必死で振り落とされたいようバランスを保つだけで精一杯。…こんな場所にいたら、誰にも見付けて貰えない。悪い想像がまた頭に入り込んで来る。

「……ハトゥンを殴ったキリだった……」

豆鉄砲喰らったような真ん丸の、漆黒の瞳を思い出した。

「許してやっても良かったのに……ハトゥン……」

目の前の雲が渦巻いて、ズボリとナナの騎馬が上昇した。

「ハトゥンでなくて、スミマセン……」

モエギの馬は目隠しされて、ナナの馬と共に降りて来た。

「……?!」

馬繋ぎ馬で雨に打たれて待っていた二人の厩番の少年は、モエギが無事戻ったのには胸を撫で下ろしたが、ナナの左目の回りの黒い新しいアザにビックリした。前の右目のアザもうっすら残っているの、まるで大陸産大熊猫だ。

「助けに行ったのに……」

「お前が姑息な事をしているからだ!!」

オロオロしている少年達の前で、モエギはナナの長い髪を引く張った。雨に濡れた髪に隠れて、ナナの左耳には、橙(だいだい)色のピアスがあった。

「これのお陰で、貴方の居所が分かったんですよ」

「だから！ それは！ 何でだ!!」

「イタイ、イタイ！ それは…貴方の櫛の石と、同じ原石から削り出した兄弟石だから……」

「何で！ お前が！ それを！ 耳に、付けている？!!」
「いいじゃないですか。貴方と、お揃いを付けていたかったんですよ」

「これを付けている限り、お前には、いつでも私が何処で何をしているか分かる……って事だな!!」

「いつでもじゃないですよ。そう願った時だけ……」

「そーゆーのをストーカーって言うんだああああ——!!」

怒り狂って更に拳を振り上げるモエギに、少年二人が飛び付いた。

「待って待って待ってくださあい!!」

「元はと言えば、僕達が悪いんです!!」

モエギがちよっと止まって二人を見ると、少年達は「ス」
と一本の木の枝を持ち出した。

「……何だ……?」

「コカの、木の枝です……」

「……?」

「僕達がうっかり、モエギ様の馬の厩の板壁に置き忘れちゃったんです。馬は、コカの実を食べて、おかしくなったんです」

「……?!!」

「すみませんでしたあ!!」

二人はモエギの前でひざまずいた。

「………厩番の仕事は、解っているな……?」

モエギはさっきまでの興奮が一気に冷めて、低い声で言った。

「は、はい………馬達の健康管理……」

「その馬の健全を害するモノを、何故厩に持ち込む?!」

「あ……う………」

「お前達の厩番は考え直さねばなるまい。長老達と議するから、沙汰あるまで謹慎している!!」

「モエギ様あ………」

モエギは冷たい顔で宣言し、雨衣を掴んで厩から去ろうとした。

「待って下さい、モエギ殿」

真剣な顔のナナがその肩を掴む。

「私に、触れるな！ お前だつて、口を差し挟む余地などない！」

しかしナナは肩を離さず続けた。

「蒼の里では……」

「ここは西風の里だ!!」

「自分の馬の責任は自分に在ります」

「………!!」

「自分の馬が怪我をしたら、凄く恥ずかしい事です。馬装は係の者がやりますが、跨がってからは自分の責任です。高く飛び

者は、必ず自分でチェックします」

「……………」

「若い者に失敗の機会を与えます。大人みんなで見守って、間違ったら正せばいいだけです。僕もそうやって育てて貰いました」

「……………」

「その為に、大人のいないこの里に、僕は来ているのです」

ナナは真剣な眼差しで少年達を見た。大人がいないから働いているが、蒼の里ではまだ修練所に通っている年だ。

「それに、シドとソラは多分、僕の為にコカの実を採って来てくれたんです」

「……………」

突然話を振られて固まった少年達に、ナナは優しく向き直った。

「そうだろう？」

「…そうなのか？」

モエギも幾分落ち着いた声で聞いた。

「…え……と……」

シドもソラも戸惑った。正直に告白すべきなんだろうか？
更に話をややこしくする事になると思うが……。

二人の迷いを見透かすように、ナナはウィンクした。

「疲れた僕の身体を元気にしてくれようとしたんですよ」

少しの、無言の時間が流れた。

「……咎めがは、なした……」

モエギが呟いた。

「落ち度は私にあった、すまない……。今後、馬の管理も、蒼の里に準じよう。老人達に議を通しておく」

「モエギ様……」

「じゃあ」

ナナはニッコリして、モエギの握っていた櫛を取って、またその髪に差し直そうとした。

「『じゃあ』じゃない!! それとこれとは別だ!」

モエギはナナの手首を掴んだ。

「乱暴に扱っちゃいけません。母君の大切なお形見ですよ」

「後でゆっくりこの珠だけ外してやる!」

「無理だと思えますよ。大長がしっかり呪文を施して埋めた筈ですから」

「な……何だと……?」

「手紙でそうお願いしましたから」

「き……ま……ま……」

シドとソラは様々な急展開に目を白黒していた。
このナナってヒト………掴めない………。

カンカンに怒ったモエギは、珠を外すのはおっさんが来た時にやらせる！ と宣言して、自宅へ立ち去った。

モエギの馬は、ナナの調査した薬湯で、夜には落ち着いた。少年達は緊張して待ったが、ナナはコカの実の事は聞いて来なかった。

「あの……」
とうとうソラが切り出した。

「ナナ様が来る日の朝に、荒地地に実を取りに行っただんです」
「その時の目的は、果たしたのかい？」

ナナは馬の鼻面を撫でながら、穏やかな声で聞いた。

「いえ、結局使いませんでした。今後使うつもりはありません」

「……そう……」

ナナは馬から手を離れた。

「なら、いい。シド、ソラ、僕は君達が好きだよ。おやすみ……」
雨衣を羽織って外に向かうナナに、少年たちは顔を上げた。

「あの……」

「僕も……僕達も……」

「好きです、ナナ様が」

「おやすみなさい……」

ナナは後ろ手に手を振って、雨の中に溶けた。

この季節に雨が続くのは珍しい。雨音は怪しいモノの気配を消し、冷たい水はヒトの集中力を削ぐ。

ナナは上空に風を流す他に、午前と夜の見回りを欠かさなかった。午後は主に子供達の所を回って、勉強を教えたりしていた。

シドとソラは厩の夜飼(よがい)が済んでからナナの所へ行き、手伝うのが日課になっていた。手伝うと言っても、筆記用具を準備したり、訪ねて来る女の子を断ったりする程度の、簡単な事しか出来なかったが、ナナはその合間に様々な話をしてくれた。

前長の浅葱(あさぎ)の君に読み書き計算は習ったし、蒼の長は風や水や、万物の結び付きを教えてくれた。そしてナナは、遠い国の伝説や歴史なんかに詳しくかった。二人はこうして教えて貰う機会のある自分達は、幸運だと思っていた。

里へ来て数日目に、ナナは書き上げた図面を見せてくれた。

「何だと思うっ？」

「…？ 建物？ 大きな…」

「修練所」

「しゅうれんしょ？」

「子供達が色々学ぶ場所だよ。こっちの端が子供達が寝起きして生活する寮になっている」

「…へえ…すごいですね…」

「他人事みたいに言うなよ。西風の里に建てるんだ」

「えっ？ ええっ？」

「この里の未来の為に、子供達は今のままじゃいけない。そう思うだろう？」

いきなりな話に、少年二人は、ピンと来ない顔をしている。

「そ…それはそうですが…。でも、こんな立派な建物、本当に建てられるんですか？」

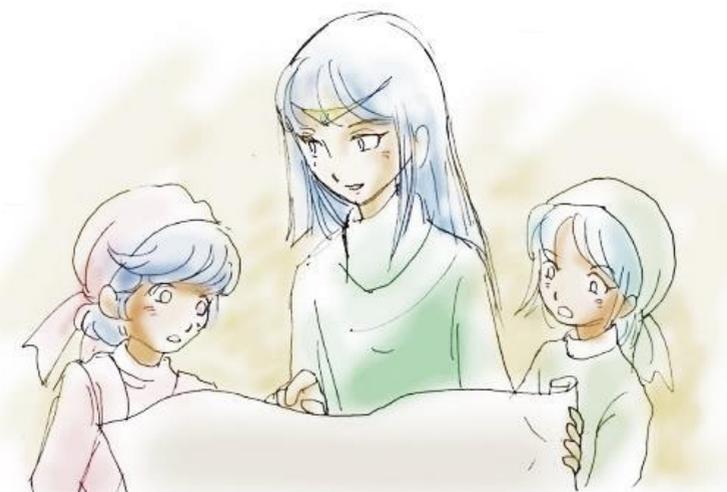
「最初から出来ないって決めつけていたら、なにも始められない」

「は…はい…」

ナナは更に、幾つかの書面を目の前に広げてくれた。

「こっちは大長が調べた西風の里の地図。この一番高台の、昔の城跡。建物は無いけれど、土台はしっかり残っているんだ。

場所はここにしようと思う。子供達は里の未来を担うんだから、里を見渡せるこの場所がぴったりだろう？」



「はあ…、でも、材料は…」

「うんうん、実は部落のこっち側の廃屋群に、けっこう良い柱が残っている。あと、池のこちら側の粘り気のある土で、素干し煉瓦が作れる」

「……」

少年たちの目が、だんだん見開かれて来た。蒼の長様やナナ様は、こんなに真剣にこの里の事を調べてくれていたんだ。すうっと住んでいる自分達でも、気付かなかった事を…。

このヒトが可能性を開いてくれたら、本当に何でも出来そうな気がして来た。

「ただ…人手なんだよな…」

「僕達、頑張って手伝います」

「うん…だけれど、絶対的に力仕事の出来る者が少ない」

「ああ…」

二人は今すぐ筋骨隆々とした大人になりたい…と思った。

「蒼の里から手伝いに来て貰う訳には行かないんですか？」

「そうだな…、でもそれは、手詰まりの場合の最終手段」

「……」

「他所から来て手出しするのは『歪み』を作る事になる。歪みは最小限にすべきなんだ」

「……」

「難しいかな、えっと、自分達の事は出来るだけ自分達で出来るようにする。でないと長続きしないんだ」

「…ああ、はあ…」

額に指を当てて、ナナはポツリと呟いた。

「砂の民…」

「…砂の民…ですか？」

「浅葱の君は砂の民と同盟を結ぼうとしていたよね。その話、再燃出来ないかな？」

「それは…、浅葱様がこの土地の風を総括する力を持っていたからです。浅葱様がいき今、砂の民に西風の里と結びメリットは無いそうです」

「ふむ…」

「ハトゥン様が言っていたから確かです。頭の堅い親父だって」
「ふうん、まあ、順当だろうね…、待って」

ナナは積まれた書類の下の方から何枚か引っ張り出した。

「ん・んんん、ふんふん…、あるんじゃないか？ メリット

…お互いに」

「あるんですか？」

「うん…、だけども、モエギ殿の怒りを買った」
ナナは額に手を当てて渋い顔をした。

「……あの、ナナ様……?」

「ん?」

「ナナ様って滅茶滅茶モテるじゃないですか。きつと蒼の里でもそうなんでしょう? 何で…その…モエギ様なんですか?」

ナナは素っ頓狂な顔をしてのけぞった。

「バしてた?!」

「当ったり前でしょう! バしてないと思ってた方が不可思議ですよ!!」

「あからさまに迫るのは逆効果だって、フィィ母さんに釘を刺されていたんだけれどな…」

「あれがアカラサマじゃないんなら、ナナ様の全力ってどんななんですか?」

「この女性に不自由しなさそうな美青年が、手練れた感じがしない原因が分かった気がする…。」

「その…さ…、モエギもって言っても、女の子達は本気じゃない。

じゃあ誰かと付き合ってみようかなって気になっても、霞の中に投網を投げたような目に遭う」

「……?」

「投網じゃ駄目なのさ。本当の相手はこの世にたった一人だけいるの?」

「そ、そ、モエギ様……?」

「うん、でも、ダメだな……」

「そう…ですか?」

「空の上で万事休すになった時、彼女、ハトウンの名前を呼んでいた」

ナナは世にも情けない顔になり、二人は何にも言えなくなつた。

正直、少し前までハトウンを応援していた。しかし今は、目の前のショボくれている青年に幸せになって欲しい気持ちが強い。本当に……何で、モエギ様なんだ……。

モエギの自宅…元は西風の長の仕事場だったが…の外でナナの声が出た。

「ちょっと、いいですか?」

モエギは櫛を机に置いて、小刀で橙色の珠をほじくり出そうとしていた所だった。

「なんだ?!」

戸口から首を出して、目を丸くしているナナに、モエギは不機嫌に聞いた。

「いえ、あの…櫛が傷んじゃいますよ」

「誰のせいでこんな苦労をしていると思っつ?」

「……」

ナナは黙って部屋に入って、自分の耳から橙色のピアスを外して机に置いた。

「……?」

「貴方がそんなに嫌がるとは思いませんでした…」

「嫌がるとか、そうじゃなくて」

「だから櫛を傷付けないで下さい。その珠に込められた幸福の祈りは本物ですから」

「……………」

「このピアスは差し上げます。それで安心でしょう」

「あ、ああ…」

モエギは机のピアスを戸惑いながら見つめた。

「いいのか?」

「何がですか?」

今度はナナがちよっと拗ねた感じで言った。

「いや…、何か、用事があったんじゃないのか?」

モエギは困って、話題を変えた。

「ああ、そうでした」

ナナは手を打って顔を上げた。

「ピクニックを計画しているんです。雨が上がったなら」

「は? ピク…ニ…?」

「ええ、女の子達を紫の丘へ連れて行ってあげよう。ほら、

この間抜け出して迷子になった女の子。紫の丘へ木の実を取りに行きたかったらしいんですよ」

「……………」

モエギは黙って片眉を吊り上げた。本当かどうか…、ナナの気を引きだかつたんじゃないのか?というのが、口に出さない皆の見解だ。

「何にしても、里に閉じ籠りつ放しじゃストレスも溜まります。だから、変な方向へエネルギーが集中するんですよ」

「あ、ああ…」

その点はモエギも同意だ。

「これが上手く行けば、子供達も何班かに分けて遠足に連れて行けますし。賛成して貰えますか?」

「ああ、そうだな」

「では引率をお願いします」

「はあ?!」

「女の子は十何人もいるし、僕は上空で護衛していた方が良いでしょう」

「あ、ああ…分かった…」

何だか勝手に話が出来上がったが、まあ、悪い事じゃない。

モエギは承知して、ナナはおやすみを言って家を出た。

出た所でシドとソラが居て、三人は目を見合わせて親指を立

てた。

翌日、図ったように雨が上がって快晴だった。

女の子達は紫の丘へ行けると聞いて、歓声を上げて喜んだ。

単にナナと外出出来るからだけでは無いのが、見ていて分かった。やはり皆、外へ行きたかったんだ。

シドとソラは大人しい馬を何頭か引き出し、女の子達はワキヤワキヤ言いながら各々に乗馬した。風の一族なのに、自分で馬に乗った事のない娘もいた。

境界は、入るのは骨だが、出るのは簡単だ。モエギが先導して十何人の騎馬は、すぐ近くの紫の丘までお行儀良く行進した。雨露に濡れた丘の灌木の間で、娘達は嬉しそうに木の実を摘んでお弁当を広げた。

ナナは上空で見守っていた。下りると厄介になりそうだし…。

「あまり遠くへ行くなよ」

丘のてっぺんで周囲に気を配りながらも、モエギも穏やかな気持ちになれていた。やっぱり皆がのびのび笑っているのは良い。早く力を付けて、皆が安心して暮らせる里にしたい…。

「モ、モエギ様〜!!」

迷子事件を起こした娘が金切りの声を上げて駆けて来た。遠く

へ行くなど言うのに、蜻蛉とんぼを追い掛けて丘の裾まで行っていたのだ。

「何だ、どうした?」

「ミ、ミミズがあ〜!!」

「なんだ、ミミズぐらいで…全く、娘つてのは…」

モエギはそちらを見やって、息が止まった。

ミミズはミミズでも、丸太ん棒みたいな十メートルもある巨大蟲だ! それが、一匹ではない。何十匹も、丘の裾でうごめいているではないか。

「な…ナナは、何をやっているんだ?!」

モエギは娘達を丘のてっぺんに呼び寄せ、自分は剣を抜いて構えた。

ミミズは動きは鈍いが、数が多くて四方から来る。

「ナナ——!!」

ナナは何故か遙か上空だった。

「雨が続いて地中が居心地悪くなったミミズが地表に出て、体温を感知して追い掛ける…、文敵にあった通りだ…」

「ナナ——?!」

モエギは再度呼び。見えていないのか? 護衛の意味がないではないか?!

「モ、モエギ様あ〜」

「大丈夫だ、固まって居ろ！ 幼い者の中に入れろ！」

モエギが剣を握り締め、ミミスが二階程の高さに鎌首をもたげた所で、
・・灰色の影が複数跳んだ。

「——!!?」

たちまちミミス達はナマス状に地面に転がり、モエギの前では久しい漆黒の青年が最後のミミスを切り捨てた。

「よっ!!」

「お前……!」

娘達の危機を救ってくれたのは、砂の民の幾人かの若者だった。

「お……お前……、何で、ここに?!」

「ちびっこナイトが使いに来た。お前、知らなかったのか？」

ハトゥンはモエギにだけ聞こえる小さい声で言った。

「何を……?」

「今日、紫の丘へ村の若いの連れて来いって、ナナが」

「ナ……ナ……が?」

「合コンだって」

「こ・う・こ・ん・……?」

「サブライズがあるって書いてあったけれど、これの事かあ?」

ハトゥンは目を見開いて、ミミスのナマスを眺めて笑った。

「あいつ、やるなあ……」

確かに、娘達の数人は、危ない所を助けてくれた若者をつつとりのした目で眺めている。手をとって礼を言っている積極的な娘もいる。

「ただ、出会わせるだけじゃ、他種族だし、こつも上手く行かなかっただろ。吊り橋効果って奴だ。ホント、あいつ、切れ者だよな! ……なあ……」

モエギを振り向いたハトゥンは凍り付いて止まった。仁王立ちのモエギが、長い髪を逆立ててメラメラと怒りに燃えていた。

「あ・ん・の・野郎おおく!!」

「スミマセン……」

振り向くと、ナナが覚悟を決めた顔で、蛇に追い詰められた砂ネズミのように畏かしこまってる居た。

「……殴ってイイですよ……。でもちょっとは手加減してね……」

「お前はああ!! その余計な一言がイラっと来るんだああ!!」
しかしモエギの振り上げた拳は止まった。ナナの前に二人の少年が立ち塞がったからだ。

「僕達も共犯ですよ」

「ごめんなさい」



「お前ら……いつの間……」

毒気を抜かれたモエギの肩に、ハトゥンの手が乗った。

「なあ、周りを見ろよ」

ナナが下りて来ているというのに、女の子達は助けてくれた砂の民の若者達しか目に入っていない。進展の早いグループはお弁当なんか囲んじゃったりしている。

「早すぎないか？」

「皆、求めていたんですよ」

モエギはまたナナを睨み付けた。

「西風の娘達は、そんな節操のない娘ではない」

「そうじゃなくて……」

「本能だつて！」

ナナを手助けするつもりでシドが口を挟んだ。

「ほ、本能だと?!」

「あ、あ……そういう意味ではなくて……」

「飢えてたんだろ」

ハトゥンが混ぜっ返した。

「う……飢えて……」

モエギが口をバクバクさせる。

「摂理です、それでしょ、ナナ様」

ソラが言って、モエギの意識がやっと戻った。

ナナは黙って、ソラに説明を預けた。

「女性が強い者に惹かれるのは、意識せずとも一族存命の摂理だつて。だからみんな、ナナ様に異常にキヤアキヤア言っていたの。選択対象が増えたら、みんなちゃんと自分の相手を見つけて出すつて」

「そう……か？」

「モエギ様、西風の里では男の子が生まるの、凄く少ないですよ」

「ああ、そういう物だろ？ 男の子は生まれにくい」

「へえ？ 砂の民の村では逆だぜ。女がなかなか生まれにくい」

ハトゥンが口を挟んだ。

「そうなのか？」

「それ、自然じゃないんですよ。僕達、それが普通と思って話題にもしなかったけれど。自然の流れの中では、男の子も女の子も、生まれる割合はそんなに変わらないんですよつて」

「……え……？」

「ホントかよ……？」

「西風の里も、砂の民も、血が濃くなり過ぎて。このままじゃ、滅ぶ方向へ行ってしまうつて」

「…………………」

「マジかよ」

「だから、摂理は、両方の部族に、交わり交流しなさい……って
言っていますっ……以上」

「良く出来ました」

ナナが手を叩いた。

「砂の民の村には女の子がホントいなくてさ。いても、数が
少な過ぎるから……あまり幸せじゃない境遇になる。女の子が笑
っていないと、村全体が暗い」

「……………」

「だから、明るくて元気な西風の娘達と合コンだって声を掛け
たら、野郎共、躍り上がって喜んでせ。普段気にもしない髪を
撫で付けたりしてな」

ハトゥンは、借りて来た猫のように畏かしこまっている荒
くれ共を、ニヤニヤしながら眺めた。取りあえず『いきなりミ
ミスを焼いて食ったりはするな!!』という、ハトゥンからのお
達しは行き届いていた。

ナナとモエギ、それにシドとソラも、丘のてっぺんで、皆か
らの裾分(すそわけ)の焼き菓子をかじりながら、喉かな風景を
眺めていた。

「親父には大目玉だな。でも、さっきの、説明すれば……、えと、
摂理……だっけっ」

「僕がお伺いしますよ。目通りもしておきたかったし」

「ああ、頼む。理屈は苦手だ」

男二人で話が弾む横で、モエギはかなりフテくされていた。

「私には、話してくれていても良かったんじゃないのか？」

「ああ……そうですが……はあ……」

「私が慌てるのを見て、溜飲を下げていたんじゃないのか？」

「まさか、そんな……」

「じゃあ、何なんだ、何で私には隠していたんだ？」

「ナナ様は、普段は流れるように説明出来るのに、モエギ様の
前だと、喋れなくなるんです」

ソラがまたタイムリーな補足を入れてくれた。

「喋れない？ お前が？ あんだけ要らん事、グダグダ、グダ

グダ、お喋りオトコのお前がか?！」

「いや……その……」

「だって何て説明すればよかったんです？」

ソラは珍しくモエギに口応えした。

「西風の娘達の気立てのよさと美貌は、外に対して立派な武器
になる、なんて」

「そんな事言っていたのかあ！ お前は……!!」

一旦立ち上がったものの、モエギは頭を抱えて座り込んだ。

「もう、いい…。お前の方が、里の事を解っている。里の為に手く立ち回れる…」

「モエギ殿？」

「私は……駄目だ…。皆の為になろうと思ってるのに、空回りばかり。能力だって開くかどうか…」

ナナも、シドもソラも黙った。さすがにやり過ぎたか…。

「湿ってんなよ、お前の価値はそんなモンじゃねえ。土俵が違
う」

ハトゥンが立ち上がった。

「今からそれを証明してやる」

そしてナナを振り返った。

「やるか」

「ええ、やりましょう」

ナナも草を払って立ち上がった。

「……c.c.」

ビックリ顔のモエギを他所に、二人は丘のてっぺんの裸地で

向かい合った。そして剣を外して上衣を脱ぎ捨てた。

その様子に、和やかに談笑していた若者達も振り返る。

「聞け!! 野郎共!!」

ハトゥンは人差し指を高々と挙げて宣言した。

「今からこいつとサシで勝負だ!!。勝った方が、西風の総領娘に・・・クくる!!」

「ウォオオオオオ——!!!!」

砂の民の若者達は大盛り上がりし、娘達も釣られて手を叩いた。

「ナナ様、頑張ってください!!」

「若、負けたら帰れませんぜ!!」

「…バ、バカ野郎…!!」

モエギが慌てふためくが、ここまで盛り上がったなら収まらない。
い。

「モエギ様、腹くくりましょうよ」

「前と違って素手ですモン。いいでしょう」

シドとソラが両側に立った。多分、前みたいに割って入らせ

ない為の防波堤役だ。仕組んでやがったなあ?!

言ってる間に白いマットのジャングルの二人は地面を蹴った。

「うおおおおお——!!」

「だあああああ——!!」

目を開けると青空だった。

飛んでいた記憶が少しづつ蘇る。

片目が見えないのは、水で濡した布が乗せられているせいだ。

(いいえ、違つんです。目一杯本気だったんですよ…)

と言つ声、シドとソラだけには聞こえていた。

* * *

砂の民の若者達は、一行を里の近くまで送ってくれた。

帰る道々、ナナはハトゥンに謝った。

「僕に付き合わせて、またモエギ殿に殴られる羽目になって、

スミマセン」

「ん？ ああ、構わないわ」

「また『私は景品ではない!!』って怒られましたか？」

「いや、違つ」

「…っ」

「『相手をよく見ろ、手加減も出来ないのか!!』って。ナナ様が暫く動かないので、モエギ様、ちょっと本気で心配していましたよ」

シドが口を挟んだ。

「ホント…っ」

蒼の妖精の青年は、本当に幸せそうな表情をした。これだけで満足してしまえるんだから、本当に可愛いヒトだなあ…。

ソラも同じ気持ちで、シドの横に並ぶ。ナナが来てから二人は、確実に多くの事を学び、多くのモノを受け取った。これをまたいつか、後から来る誰かに渡したい……そう思った。

「お前さあ……」

視界の外から対戦相手の声がした。

「あそこまで盛り上げといて、一撃でノサシるなよ。一気に盛り下がったぞ」

「スミマセン…」

「申し込んで来たのはお前だろ」

「……ヒトを、殴ったコト、ないんです……」

「……」

呆れた溜め息が何重にも聞こえた。

「コクったんですか…」

「……ああ……」

「…それで…っ」

頭の上からハトゥンの顔が視界に入った。鼻血を流していたが、ウインクして片耳の橙色のピアスを見せてくれた。

「これでよかったですら」

やはり視界の外からぶっきらぼうなモエギの音がした。

「最初からこのつもりでピアスを持って来たんだろ。見え透いた道化なんか演じやがって」

「……」

ナナは目を閉じて黙った。

その喉元で、

夜…ナナの部屋にカンテラの灯がともる。

「モエギ様は、もうそういうの、気にしないと思います。自分を賭ける事が、物みたいに扱われているとか」

今日は仕事はお預けにして、休んで下さい…と、ナナを無理矢理寝かし付けて、シドとソラは寝物語のように話した。

「『お前の価値を証明する』ってのの意味を、モエギ様が聞いて詰めたんです。そしたらハトウン様、ノビてるナナ様を指差して、『こいつを見ろ、お前が言うように、殴り合いをするようなタマか？』という男をそういう暴挙に走らせる…、それがお前の価値だ』ですって。さすがのモエギ様も、目を白黒させて黙ってしまいました」

話しながら二人がふと見ると、ナナは目を閉じていたけれど、その端から涙がこぼれ落ちていた。

「い、痛みますか?!」

「いや…」

「やっぱり…悔しいですか？ 僕、ちょっとは応援してましたよ」

「いや、や、そういうじゃない…」

「は、は…」

「任期が過ぎたら、ここを去らなきゃならない。今からそれを考えて、涙が出ちゃうんだ…」



「……………」

「…早く、修練所、作りたいな…」

「作りましょう。みんなで作りましょう」

ピクニックの翌日には、ナナは砂の民の総領に話をしに行った。

頑固な総領は、最初ナナが若僧なのが気に食わない風だった。が、西風の里の修練所の普請(ふしん)を砂の民の男手が手伝う見返りを問うた時、真面目な顔で『未来です』と答えてしまうこの若僧を、ちょっと気に入ったようだった。

大熊猫のような両目アザの理由を聞いて大笑いし、今度は喧嘩の仕方を享受して進ぜようと、里の出口まで見送ってくれた。西風の里の老人達は、モエギが黙らせた。これ位は自分にやれなければ…という使命感に燃えていた。

両部落ともまだ結界は外せないが、あの迷子娘が主催者になって、交流会みたいなのが企画された。それなりにカップルも成立しつつあるようだ。

そうして、ナナの二回目の任期が終わろうとしていた。もともと常駐の大長の所用の間の繋ぎだから、短いのだ。

ナナだって修行中の身だ。蒼の里の次期長として、会得しな

ければならない事が山程ある。

「お前が次期長とは、蒼の里の将来が危ぶまれるな」

「その憎まれ口ももう聞けないと思うと、寂しいですよ」

里の手前の馬繋ぎ場で、定番のモエギとナナの掛け合いも、シドとソラには聞き慣れた物となった。

「ハトゥン様から、これ…」

ハトゥンにまた剣を習い始めたシドに手渡されたそれは、砂漠の琥珀で出来た小さなピアスだった。

「太陽の力を凝縮して、災難から守ってくれるらしいです」

「うん…綺麗だ」

ナナは目を細めてそれを太陽に透かしてから、嬉しそうに耳に付けた。そうして里の奥の、骨組みが出来つつある修練所に目をやった。

「見送りは溜っばいから遠慮する」

と言っていたハトゥンが、屋根の梁の上から手を振る。

砂の民の若者達が西風の子供達の為の修練所を建て、その若者達の為に西風の娘達が食事を用意している。ナナはその光景を大切に目に焼き付けた。

「来ました!」

目のいいソラが、空の点を一番に見付けた。

「…？ あれ…？？」

「どうした？」

「…二頭、いますか？」

「…？」

旋風を巻き起こして降りて来たのは、大長でもツバクロでもなかった。モエギにもシドとソラにも知らない顔で、ナナには驚きの人選だった。

瘦せた馬の上で真っ青でゼゼエ言っている、羽根のある水色の妖精、カワセミ。そしてその伴侶でナナの妹、元氣一杯のユコだ。

「お…大長は…？」

「叔父さまも、お父さまも、流感(りゅうかん)なの」

「り…流感…」

「もう大丈夫なんだけれど、子供と年寄りばかりの西風の里へ行くのは不味(くわい)かろうって。あ、貴方がモエギさん？ アタシ、ユコ、宜しくね！」

ユコはせかせかと鞍の荷物を降ろしながら勝手に喋った。

「んで、じゃあ、新婚旅行(こんこんりょこう)がてら、お前(まへ)達行って来なさいって」

「そんな事言っていないじゃないか…」

息も絶え絶えのカワセミがやっと口を挟む。

「ナナの任期を延ばせばいいだけなのに、ユコが無理矢理…」

フラフラのカワセミは無視され、長い巻き髪の妖精は嬉々として荷物から色々と引っ張り出してた。

「貴方達がシドとソラね！ 逢えるの楽しみにしていたわ！ お土産お土産！」

一方的に包みを渡されて、モエギも二人も茫然としている。

ナナはそっとカワセミに寄った。

「大丈夫ですか？」

「ボクはシエット気流は絶対嫌(きら)だって言ったのに、ユコが…」

「ってゆーか、イけるんですか？ 西風の里の常駐」

超ヒト見知りのカワセミ長には酷(こ)な仕事ではないのか？

「ユコが任せとけて。とにかく、新婚(こんこん)なのにボクが忙(いそ)が過ぎたのが相当(さうじやう)不満(ふまん)だったみたいで…」

「おい…」

モエギには色々と聞き捨てならなかった。

「嫌々(きら)来て貰(もら)っても困る。新婚旅行(こんこんりょこう)気分(きぶん)の片手間(かたてま)ってのも…」

モエギが肩に手を掛けた瞬間、水色の妖精は飛び退(ひき)さった。

「さ・触(ふ)るな!! …術(まじ)が逃(に)げる…!!」

「な…？」

呆気(だいき)に取られるモエギの横で、ナナはシドとソラに小声で解

説した。

「カワセミ長は、特定の女性以外に触られると魔法力が落ちるんだ」

「うわー！ めんどくさっ……!!」

ヒューヒューという口笛が聞こえる。建てかけ修練所の梁の上に男達が全員登って、ユコを見ているのだ。

性格とは裏腹に、美の女神に愛されている妹は、物凄く自立つ。西風の娘達は明らかに不機嫌だ。

「ユ・ユコを見るなあ……!!」

カワセミが立ち塞がるが、貧血起こしてぶらついてユコに支えられている。

「ひどい……」

一生懸命立て直した里に、何て連中を送り込んでくれるんだ……。

「ナナア……」

カワセミが、ユコからナナの方へ倒れ込んで来た。

「ボクがあげた石、役に立った?」

モエギの目がキラリと光る。

「あの、ストーリーカー石はお前が作ったのかっ?!」

「え〜『ストーリーカー石』なんかじゃない!」

カワセミはナナの後ろに回って、目だけ出して反論した。

「対の石の居所が分かるって、ストーリーカー石以外の何なんだ!!」

「え?! だって…違う、違う…!!」

「カワセミ長、もういいですから…」

「石って…『兄弟石』の事? カワセミ様がナナにあげた」

ユコが乱入して来た。

「ユコ! 喋るな!」

「いや、喋って貰おう!」

モエギはナナの頭を押さえ、ユコは兄の様子などお構いなしに喋り続けた。

「カワセミ様が予知したの。『ナナの大切なヒト』が、空から降りられなくてベソかいているのが見えた…って」

「……」

「で、ナナに兄弟石をあげたの。相手にも持たせておけば、いつでも助けに行けるでしょう」

「……」

「で、『ナナの大切なヒト』ってだあれ?!」

ユコは嬉しそうにキョロキョロした。

「……」

「……」

「…行くぞ……」

黙ってしまったモエギとナナに何かを察して、カワセミが「」を抱えて退場した。

「…その…ナナ……」

「聞かなかった事にして貰えませんか…」

「礼を、言っていないかった…、助けられたというのに」

「僕…は…」

「感謝する。私の命と、西風の里と…、たくさんなモノを救ってくれた。…感謝する！」

モエギは進み出てナナの手を取った。

その瞬間の天にも昇るようなナナの横顔を見て、シドとソラは、幸せのお裾分けを買った気分がして、肩をすぼめた。

「んで、残りの石は？」

カワセミの腕を脱け出して、ユユがまた乱入して来た。

「なくしちゃいけないからって一杯あげたでしょう？ 残っていたら、アタシも欲しいの」

「ユ…ユユ…」

ナナの狼狽えように、モエギは鋭く目を光らせて、その胸べらを掴んで引っ張った。

素肌の胸に、数珠繋ぎの橙色の珠がかかっていた。

「だって…、貴方とお揃いを付けていたかっ……」

ナナが喋り終わる前に、モエギの拳が唸った。

ひっくり返ったり暴れたり、大騒ぎの面々を梁の上から眺めながら、ハトゥンだけは愉しそうにニヤついていた。

「また面白そうな連中がやって来たな！ 今度はどんな愉快な事をやらかしてくれるんだ？」

見上げる空の雲が切れて、ホンの少しの春の気配が漂っていた。

くおしまい

二〇〇九・二一・三一

